



9月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2024年発行

No.477

2024年

秋闇・年末一時金要求提出

私達労働組合（J M I T U）

は10月9日にセガ、S L S
に対し、秋闇・年末一時金要求を提出します。

4、新人事制度を廃止し、導入前の賃金体系に戻すこと。

要求内容は以下の通り

5、昇格の基準を明確にし、
社員が納得できる昇格制度にすること。

1、アルバイト、パートタイ

マーの時給を2000円以上にすること。

2、アルバイト、パートタイ

マー、派遣・請負社員を本人の希望があれば正社員にする」と。

3、アルバイト、パートタイ

マーに退職金制度を設けること。

4、高齢者再雇用における有期契約社員の給与を、定期的に見直すこと。

年時の月額基準内賃金の80%で算定し支給すること。希望するものには70歳まで再雇用すること。

と。

9、リロクラブポイントを年間5万円分にすること。

アルバイト、パートタイマーにもポイントを付与すること。

6、人事制度において評価給がテーブルの上段に達した場合、昇格試験の機会を与えること。

10、事業所の移転・統廃合、会社分割・合併・営業譲渡など企業組織の変更、子会社の設立、海外への

生産移転、工場・営業所の進出、新業種の進出・

企業間提携、廃業、企業

倒産にかかる私的・法的手続きの申立・実行、

その他、重要な経営施策

の変更については、労働組合と事前に協議し、同意を得たうえで実行すること。

11、退職金を、勤続1年につき基準内賃金の2ヶ月分とする。

12、家族手当を妻3万円、子（出生児から高校卒業まで）2万円と支給すること。アルバイト、パートタイマーにも家族手当を支給すること。

13、業務外傷病有給休暇を、一般従業員にも現行10日から最高60日（休日除く）を与えること。診断書代の実費を会社負担とすること。

14、社会保険料の負担割合

を労使3対7にすること。

15、本人が結婚するときの

結婚休暇は、連続2週間（休日含む）とし、子供が結婚するときは3日（休日を含まず）とすること。

18、アルバイト、パートタ

イマーに社員同様、慶弔休暇を付与すること。

SLS

2024年年末一時金と

して、賞与資格別基準額を

2万円底上げし、係数4.

19、災害等による自宅待機や早退・遅刻について、

正規、非正規にかかわらず賃金を100%保証すること。

年末一時金

16、忌引休暇を、喪主7日、正父母・配偶者・子供

の場合7日、祖父母・兄弟・姉妹・配偶者の父母の場合5日、伯

セガ

2024年年末一時金と

して、基本給の4カ月分を

支給すること。

(叔)父・伯(叔)母・配偶者の兄弟の場合2日

有期契約社員にも正社員同様支給すること。ただし

査定を行わないこと。及び

パートタイマー、アルバイト従業員にも、年末一時金

を支給すること。



17、家賃補助について家賃の30%を会社が支給すること。

目 標

仙洞田一彦

そのごく一部分の職場です。
どういう計算をしたのでしょうか。

昔、昔、ある所に、笑顔の絶えない職場がありました。明るいおしゃべりも聞こえていました。そうかといって、仕事が進まないわけではありませんでした。職場の長もみんなで、職場の輪に入つてなごやかに働いていました。

ところがある日、上方から命令が来ました。どういうふうに計算したのか分かりませんが、その職場のもうけをもつと上げなさいというのです。職場のもうけといつても、そこは物を仕入れて、売っているわけでもありません。会社全体としては、そういう計算ができるかもしれません、

よく理解できなくとも、上から命令がありますと、なんとも、おしゃべりも少し減りました。それが進まないわけではありません。今までだつてがんばつていなかつたわけではありません。

自分で、ここは頑張りどころだなと思えば、体調が多少悪くても出勤していました。期末、月末の忙しい時に、子供の学校の行事が入つても、休まずに出勤することもあります。職場のもうけといつても、半年くらいたつたころ、「以前と全く変わっていない。目標をかなり下回ったまままだ」と、上から言つて来たよう

す。職場の長も上に呼び出され、目標が達成されなければ、クビにするとか、脅かされたようでした。もともと明るい性格の人でしたから、その落ち込み方は職場のみんなが見えていても気の毒になるくらいでした。あつけらかんとしていた。この人に悩みなんかあるのかと思つていただけに深刻でした。

職場のみんなも同情し、仕事をこれまで以上にがんばろうと思つました。しかし、和氣あいあいという雰囲気はなくなりました。職場が暗くなることは、活気がなくなるということです。一生懸命にやつてゐるつもりでも、仕事の速さが落ちました。

それでも職場の長は、笑顔は減つたものの、体調の悪そ

うな人を見れば体を心配し、休暇を取ることを勧めました。不幸のあつた人には、忙しくても忌引休暇を認めました。

しかし職場の長は、何度も呼び出されていました。そのたびに落ち込み、ついに退職しました。何があつたのかは分かりません。その職場の長の人柄から推測するしかありません。職場の仲間を大切にする人でした。悩みを聞き、寄り添うことのできる人でした。そういう生き方にそわない話が、上方から強制されていましたのかもしれません。

職場の長が変わりました。真っ先にしたことは、職場のあちこちに監視カメラをつけたことです。職場の長の机の上のパソコンから、その画面

を見ることがあります。初めのうちはそのカメラに向かつて「あかんべい」をして見せたのもいました。無論、職場の長が机にいない時を狙つてましたのです。周りのみんなは大笑い、とは言つても以前とは違ひ、声をたてずに口を大きく開けただけです。

ところが録画されていたのです。「あかんべい」をした女性は、職場のみんなを笑わせて明るくする人でしたが、クビになりました。

これはおそろしい事ですなどと、改めて言う必要もないでしょう。カメラやマイクを意識し、仕事中の会話はなくなりました。

ある人が、肩が凝つたのか、作業中の手を止めて、何度も首を回したり、肩の上

げ下げをしたりしていました。その人ばかりではありません。そうですが、労働時間が長くなつたのです。残業時間が増えたのです。休日出勤も、以前は数えるほどしかなかつたのに、日常的になりました。

肩の上げ下げ、首を回す運動は歳の行つた人ばかりでなく、若い人もやるようになります。

すると監視カメラを見ていました。職場の長がやつきました。「さぼるんじやない」あるいは「会社は学校と違う。体操なんかする所じゃない」と怒鳴りました。その怒鳴り声が何度も重なると、みんなもそれを覚悟で体操しました。画面できないほど体がきつくなつていたのです。

ある日のこと、職場では歳

の方の人が、腰に手を当てて、膝の屈伸をしていました。長時間の立ち作業が、膝に来たのかもしれません。

膝の屈伸をしているところに職場の長が飛んできました。

すると、今日は怒鳴りません。体操を手伝うかのように、そ

の後ろに立ち、その人の腰に自分の両手を当てて「いち、に、さん、いち、に、さん」と、声を出して自分も、その人に合わせて屈伸を始めたのです。

その人が屈伸を止めようとしました。「さぼるんじやない」あるいは「会社は学校と違う。体操なんかする所じゃない」と怒鳴りました。その背後から「いち、に、さん、いち、に、さん」とでかい声を

出して、掛け声も屈伸も止めようとしません。いやその人の屈伸を止めさせようとします。

まわりのみんなは、はじめ

は、その二人の姿に吹き出し

そうになりました。しかし、

屈伸を止めたくても止められないその人の表情は、だんだん困ったように歪んでいきました。まわりの人も、職場の

長の行為を、その人の表情からイヤガラセと感じるようになりました。屈辱的というの

に、やな気分にさせられました。膝の屈伸をしていた、例の人

もやがて職場を去つていきました。みんなのいる前で、あいつははずかしめを受けたので、心に深い傷を負つたのだ

と思います。

こんなことがあって、仕事中に肩にこりを感じても、首を回すことすらできなくなりました。そういうしているうちに、残業代が減らされるこ

とになりました。残業する時間はこれまでと同じです。残業手当の付かない時間が設けられたのです。これを機にさらに、職場から仲間が去つていきました。

目標が変わらないので、一人当たりの仕事量も増えました。

ある日、立ち仕事をしていに折つてしましました。周りのみんなは駆け寄りました。

「大丈夫か」

声をかける者もいましたし、「おい、大丈夫か」と言って、体を揺する者もいました。

駆けてきた職場の長が言いました。

「みんな仕事をしろ。人を助けるのは仕事じゃない。仕事だ、仕事だ。自分の仕事にか

かれ。目標を実現するんだ」

みんなはその場を離れました。うすくまつてしまつた人は、さいわい、少しして自力で立ち上がる事が出来ました。

職場の長は、それを見届ける

と、「仮病使うな」と吐き捨て

て、忌々しそうに事務所に戻つて行きました。仮病なんかではないはずです。貧血かな

んかで倒れたのでしょうか。

ある日、職場の長が、職場の見回りに来ました。血走つた眼をしています。職場のみんなに対する感情が、目に表

れているのでしょうか。それとも体の異常が目に出ている

のでしょうか。そんな様子を横目で見ながら、みんなふだん通りというか、緊張して仕事をしていました。

「仕事をつづけた方が、身のためだぞ。仮病かもしけん」

するとバタンと、みんなの

後ろで大きな音がしました。

立てかけてあつた柱が倒れる

立派な音でした。振り返ると、

職場の長が床に倒れています。

誰かが駆け寄るうとしました。

「仕事をしていた方がいいぞ」

と、とっさにささやくような声がしました。

「見て見ぬふりは出来ないだろう」

と、答えた声もささやくよ

うな声でした。

「助けに走つて『さぼるな』

と怒鳴られたんではたまらん」

これもささやくよくな、別

の声でした。

「呼吸しているか」「わからん」

「仕事をつづけた方が、身のためだぞ。仮病かもしけん」

「演技かもしけん」

「職場は人を助けるところじゃないぞ」

「会社の罠かもしえん」

この後も、ささやくような

声での会話が続きました。

「職場目標達成のためだ、仕

事を続けよう」

ささやくような声でしたが、

力強さが感じられました。確

信もこめられていました。

「おう」

みんなが答え、みんなは今

までやつていた仕事に戻りました。

会話が聞こえていたのかど

うか、部下の声を聞いて喜ん

でいたのかどうかわかりませ

んが、職場の長はそこに横たわつたままでしたとき。